



Data

監督・脚本・編集：深田晃司
出演：筒井真理子／市川実日子／
池松壮亮／吹越満／須藤漣
／小川未祐／大方斐紗子／
川隅奈保子

👁️👁️ みどころ

深田晃司は、『歓待』（10年）以降私はずっと注目し、期待している若手監督。しかして、本作はカンヌで絶賛された『淵に立つ』（16年）でぞっこん惚れ込んだ女優・筒井真理子を撮りたいという思いから立ち上がった企画だ。

本作のテーマは、誰もが突然加害者になりうるという理不尽さ。深田監督のミュージックとも言うべき、演技派ベテラン（？）女優・筒井真理子は、その「よこがお」からそれをいかに表現？そして、若手演技派を代表する市川実日子と池松壮亮がいかに筒井に絡んでいくの？

「現在と過去、現実と幻想を自在に往還する説話法」による本作は難解。新聞紙評やパンフレットのレビューもクソ難しい。しかし、そんな本作は法曹界でもお勉強の素材として最適！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■深田晃司監督の作品は必見！この女優も必見！■□■

私が深田晃司監督の名前をはじめて知ったのは、『歓待』（10年）を観た時（『シネマ 27』160頁）。その面白さに「啞然」としたうえ、『ほとりの朔子』（13年）（『シネマ 32』115頁）では、鶴田真由と二階堂ふみという新旧のベストコンビに注目すると共に、ひねったタイトルと二階堂ふみの等身大の瑞々しい演技に注目し、星5つをつけた。『さようなら』（15年）（『シネマ 37』未掲載分）は私にはイマイチだったが、その後の『淵に立つ』（16年）（『シネマ 38』79頁）は、第69回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門で審査員賞を受賞する等、彼の出世作になった。本作のパンフレットにあるイントロダクションでは、本作の編集、脚本、監督をした深田晃司監督について、「ほとばしる才能をカンヌが見逃すは

ずはなかった」と紹介しているほどだ。『海を駆ける』（18年）も、私にはイマイチだった（『シネマ 42』未掲載分）が、そんな深田晃司監督の最新作が公開されると聞けば、そりゃ必見！

他方、『淵に立つ』で深田晃司監督とはじめて組んだ筒井真理子は、同作で第71回毎日映画コンクール女優主演賞、第31回高崎映画祭最優秀主演女優賞、第38回ヨコハマ映画祭主演女優賞など多数の賞を受賞した女優。とりたてて美人というわけでもなく、また一気にブレイクした大女優という訳でもないが、特筆すべきはその演技力。深田監督は『淵に立つ』でこの女優にぞっこん惚れ込んだようで、本作は「筒井真理子さんを撮りたいという思いから立ち上がった企画」らしい。中国の賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督は、『プラットホーム』（00年）以来ずっと女優趙濤（チャオ・タオ）を起用して映画を撮り続けており、2019年9月に日本で公開される『帰れない二人（江湖儿女/Ash Is Purest White）』でもそれは同じだ。したがって、趙濤は「賈樟柯監督のミューズ」と呼ばれているが、1982年の早稲田大学在学中に初舞台を踏んだという女優筒井真理子は、1980年生まれの深田晃司監督のミューズ！そんな女優・筒井真理子も本作で必見！

■□■この若手男優にも注目！ちなみに、歳の差は？■□■

本作冒頭、はじめて訪れた美容院で、美しい黒髪を「明るい色のブラウンに染めて下さい」と注文するリサ（筒井真理子）の姿が描かれる。指名された美容師米田和道（池松壮亮）は嬉しそうに、「前の店でのお客様ですか」と質問したが、それに対して「いいえ、今日が初めてです」と答えられたのでは、なぜ自分が指名されたのかわかるはずがない。そのため、客と美容師との会話はかなりちぐはぐだが、まずそんな点に注目させるのが、深田監督の狙らしい。

その数日後、ゴミ捨て場で和道と偶然出会った（？）リサが話しかけ、「お近くですか？」と質問する和道に対して、「そのマンションです」と答えたらうえ、自分はリサだと名乗り、和道の名前だけでなく、住所まで書いてもらうシーンを見ていると、どこか不自然だ。そう思っていると、リサはマンションには入らず、昭和時代の六畳一間のような安アパートに入って行ったうえ、窓から向かいにある和道の部屋を見ていたから、アレレ……。こりゃ、最近はやりの（？）“年増女”による、ハンサムな若者に対する新手のストーカー……。そう思い、次に物語はどう進んでいくのだろうかと考えていると、筒井真理子は、リサではなく市子として訪問ステーションに勤務し、訪問先の大石家で働いているからアレレ……。こりゃ一体どうなってるの？

近時のテレビドラマの延長のような邦画は、何でも説明調でわかりやすいから、ちょっと居眠りしてもストーリーがわかるが、本作はそうではない。どうも女優・筒井真理子がリサとして和道に接触している（？）物語と、訪問看護師の市子として大石家で働いている物語とは時期がズレており、本作はその2つの物語を同時並行で描いているらしい。な

るほど、それも深田監督が本作の演出で工夫した点だろう。そう思っていると、一方では、市子になっていた大石家の長女基子（市川実日子）の妹サキ（小川未祐）が突然行方不明になるというミステリーまがいの展開となり、他方では、和道とリサの濃密なラブシーンまで飛び出すので、2つの物語の全く異質な展開に注目！

若手のイケメン俳優である池松壮亮は、石井裕也監督の『町田くんの世界』（19年）はイマイチだったが、塚本晋也監督の時代劇『斬、』（18年）での演技は素晴らしかった（『シネマ 43』308頁）。彼は1990年生まれだから、何と筒井真理子が舞台デビューした早稲田大学在学中の1982年にはまだ生まれていない。そんな2人のラブシーンは一体どんなシチュエーションに？そして、失礼ながら2人の年の差は・・・？

■□■この若手女優も演技派！その謎の行動に注目！■□■

市子が自分の祖母塔子（大方斐紗子）を介護してくれている姿を見て、基子が自分も介護福祉士になりたいと思った、のかどうかまでは知らないが、大石家の長女基子は、今その夢に向けて勉強を始めていた。そして、市子はその勉強を見てやっていたが、その風景を見てみると、この2人はどこかヘン。その奇妙さは、休日に動物園見学に行った2人が交わす秘密の打ち明け話を聞いていると、よくわかる。もともと、親友同士では、まれに互いの秘密の暴露合戦をすることがあり、それによって互いに信頼関係が深まることから、良く考えれば市子と基子はそんな仲？社会に馴染めず無職だった基子が、市子を見て介護福祉士を目指し始めたことに母親の洋子（川隅奈保子）は一安心していたが、ある日、中学生の妹サキが放課後、市子と基子と喫茶店で勉強した後に、先に1人で学習塾に行き、その帰宅途中に姿を消してしまう事件が起きたから大変だ。1週間後、サキは無事に保護されたが、未成年者略取誘拐の罪で逮捕されたのは、鈴木辰男（須藤蓮）という若者だった。なぜこの男はサキを誘拐したの？

『チャップリンからの贈りもの』（14年）（『シネマ 36』78頁）や、『ゲティ家の身代金』（17年）（『シネマ 42』172頁）、さらに『幸福なラザロ』（17年）では、誘拐事件が映画のテーマになっていたが、本作はそれを描くことが目的ではない。しかし、誘拐犯が鈴木辰男だったことがテレビのニュースやトーク番組で大々的に報道される中、ある日この辰男が市子の甥であることが判明したから、ビックリ。好奇心の塊のようなマスコミは、鈴木辰男をよく知る親族として市子への取材を求めて殺到したから、市子が勤めていた訪問ステーションは大変。また、誘拐犯が自分の甥っ子だったというのにそれをひと言も語らず、それまでと同じようにシャーシャーと大石家の訪問介護に市子が来ていたことに怒ったのが母親の洋子。そりゃ、週刊誌の記事の中に書かれている女が、目の前で従前と同じように介護の仕事をしていたのでは、洋子が頭にきたのは当然だ。

もともと、そんな週刊誌の記事は、テレビに直接顔を出した基子が、あの日動物園で市子が語った甥の辰男についての「ある秘密の話」を公然と語ったことが原因だったから、

一体2人の関係はどうなっているの？テレビ画面に映る基子のそんな姿を市子は唖然と見つめていたが、さて、基子が公然としゃべった秘密の話とは・・・？基子はなぜそんな市子の2人が親友であることを前提とした2人だけの秘密の話を、マスコミに暴露してしまったの？そして、それによって介護ステーションの仕事を失い、社会的敗北者になっていく市子は、その後いかなる行動を・・・？

■市子はなぜ加害者に？今や誰もが加害者に？■

本作のパンフレットには、「DIRECTOR'S STATEMENT」なるものがあり、そこでは「『よこがお』製作にあたって」の深田監督の思い（狙い）が1ページにわたって書かれている。そこでの「メインモチーフは『市子』」の部分はよくわかるのだが、「生きることの子行演習」として書かれている部分はきわめて難解だ。

フランスが人権の元祖国なら、日本だって人権尊重の国。したがって、容疑者の人権保護には様々な手当てがされているが、犯罪者家族の保護は？そんな珍しい視点でつくられた問題提起作が『誰も守ってくれない』（08年）だった（『シネマ22』258頁）が、深田監督が本作で狙ったのは、「何の悪意も無いのに加害者側の立場に立たされた女の苦悩を通して、現代日本の危うい空気を映し出す」ことだ。2019年7月16日付日本経済新聞夕刊で深田監督は、「誰もが加害者になりうる」との見出しで、「悪意も動機も目的もないのに加害者の立場に立ってしまう。それは誰にも起こりうる。被害者と加害者をくっきり分けようとする社会で、加害者の周辺にいる家族はどんどん追いつめられていく」、「誰もが被害者になってしまう可能性よりも、誰もが加害者になってしまう可能性の方に関心があった。日本の歴史は被害者の視点が余りに強すぎるから」と語っているから、その言葉の意味を、「DIRECTOR'S STATEMENT」の文章と共にしっかり味わいたい。

ちなみに、本作については、石飛徳樹（朝日新聞）の他、宇田川幸洋（日本経済新聞）と暉峻創三（朝日新聞）の新聞紙評があるが、その両者とも本作を絶賛している。とりわけ、暉峻氏の評論では「異性愛なのか同性愛なのか、好意なのか憎しみなのかさえ、監督は敢えて明快に分けようとはしていない」とまで踏み込み、また「人間というものの得体の知れなさ、一寸先がどう転ぶかさえわからない怖さ。そうしたものを丸ごと引き受けて、真正面から見つめようとした作品だ」とまとめているが、その意味は・・・？

■子供時代の秘密の話は、両者とも性的なにおいが・・・■

本作では、社会福祉士になろうと市子に勉強を見てもらいながら頑張っている基子のエキセントリックさが顕著だが、どうも彼女の市子に対する思い（信頼）には、憧れ以上の（性的な）感情があるらしい。男の私にはそれが如何なるものかよくわからないが、まず最初に、基子が市子に対して話す、妹サキとの子供時代のある秘密には、性的なにおいが付きまとっている。それを聞いて、市子も基子に対して「甥の辰男が小さい頃、勃起して

いることに驚いて、好奇心から思わず彼のズボンを降ろしてしまった」という秘密の話をしてしまったわけだが、まさかそんな話が公の場で語られるとは……。そんな考えられない基子の行動によって、理不尽にも市子は加害者に仕立て上げられてしまったわけだが、そうかといってその復讐のターゲットが、基子の恋人だった和道に向かっているのは如何なもの……？

本作中盤、ベテラン女優(?) 筒井真理子が、若手男優池松壮亮と交わすベッドシーンは予想以上に大胆だから、それにも注目(?) だが、突然周りが明るくなり、さんさんと太陽の明かりが当たる押し入れの中で、素っ裸になった男女が絡み合っているシーンを見ると、なるほどこれは市子が基子から聞いた秘密の話がこういう形で夢の中に表れているのかと思いが当たるが、さて現実……？

その他、本作では、市子と基子がなぜか動物園の中で動物を見ながら互いに暴露し合った秘密の話には性的なおいが満ち溢れているので、それに注目。その結果、朝日新聞における深田監督の表現によると、「誰もが被害者と同化し、加害者にリンチを加える。市子は恐怖心を抱き、追いつめられ、何も言い出せなくなる」わけだが、そんな複雑な市子の内心を女優・筒井真理子はいかなる演技で表現……？ 暉峻氏の新聞紙評に書いてあるように、「現在と過去、現実と幻想を、自在に往還する説話法」が目を引くので、それに十分注意しながら鑑賞したい。

■□■法曹界でもたまにはこんなクソ難しい邦画でお勉強を！■□■

近時の法曹界は、2004年に華々しくスタートした法科大学院の「崩壊」が進む中、法曹を目指す若者が減ってしまうという、とんでもない現実と直面している。その結果、三権分立の一翼を担う司法の容量を増やすという「司法改革」の本来の理念、目標は失われ、出来の悪い弁護士を大量に生み出す現実になっているのは大きな悲劇だ。そんな法曹にならないため、私は以前から「映画から学ぶ法律」の重要性を提唱し、今年3月には『“法廷モノ” 名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』を出版した。本作は直接法律問題をテーマにした映画ではないが、誰もが加害者になりうるという現実(悲劇)を考える意味で、本作はその教材としても最適だ。

本作のパンフレットには、①深田晃司×筒井真理子対談、②筒井真理子インタビュー、③市川実日子インタビュー、④池松壮亮インタビュー、⑤深田晃司監督インタビューの他、①森直人氏(映画評論家)の「REVIEW_1 様々な楕円形の生が絡み合う『よこがお』に、複雑な現代の圧縮図を見る。」、②佐々木俊尚氏(作家・ジャーナリスト)の「REVIEW_2 ときに踏み越え、ときに踏みとどまり、それでも生きていく。」があるので、これも必読だ。監督や出演者たちのインタビューはそれなりに本作をわかりやすく解説してくれているが、この2つのレビューはとにかく難解。しかし、たまにはこんなクソ難しい文章を読んで、その意味を考えることも大切だ。それらを読むことが、近時の邦画

には珍しくクソ難しい本作のような映画を理解する一助になるはずだ。したがって、法曹界でもそれらを参考にしながら、たまにはこんなクソ難しい邦画でお勉強を！

2019（令和元）年8月6日記